

化学物質過敏症の啓発シンボルカラーのグリーンライトアップを今年も開催！

国立病院機構盛岡病院 呼吸器内科・アレルギー科 水城まさみ

化学物質過敏症（CS）は通常では問題にならないような低濃度の化学物質に過敏に反応して頭痛、めまい、気分不良、倦怠感、脱力、体の痛み、腹痛、下痢、うつ症状、集中力低下、記憶力障害など多臓器の症状を繰り返して起こし、重症化すると日常生活はおろか仕事や学業など社会的活動が困難になり大きな社会問題となっています。患者数は少なくとも 70～100 万人と推定され、さらに増加傾向となっています。その原因として、本邦では受動喫煙対策の遅れ、高残香性の柔軟剤などの香料の氾濫、大規模耐震工事や改修工事の増加、有機リン農薬以後のネオニコチノイドなどの農薬の頻用など種々の要因が考えられます。一方慢性の神経系・免疫系の疾患として CS と親戚の疾患として位置付けられている慢性疲労症候群（CFS）は今まで元気に生活されていた方が、ある日突然激しい疲労、頭痛、微熱、筋肉痛や思考力・集中力の低下をもたらす疾患で患者数は推定 30 万人とされています。症状は CS と類似のものも多く、最近では両者が合併することもあることが分かってきました。明確な原因は不明ですが、感染症の後に起こってくることが多く、脳の何らかの炎症が原因ではないかと言われています。この他に親戚の疾患として体のあちこちが痛くなる線維筋痛症があります。

「クリミアの天使」と呼ばれたナイチンゲールは、**CFS** のため、人生の半分以上をベッドの上で過ごしたと言われています。5 月 12 日は彼女の誕生日ですが、それにちなんで看護について学ぶ講演会や病気啓発イベントが各地で行われています。これらの慢性の神経系・免疫系の疾患は数十年前には概念すらもなかった新しい疾患ですが、医療従事者にも周知されておらず、家族を含め周囲の人々に病気のことを理解されずに苦しんでいる患者さんがたくさんおられます。看護週間に行われる世界規模のライトアップイベントはそれぞれの疾患のシンボルカラーで滝や、橋、建物をライトアップして孤独な戦いを続けている患者さんに希望の光を届けるために始められました。2 年前に日本では **CFS** の支援団体である **CFS** 支援ネットワーク（代表：石川真紀さん）が初めて参加し青森県観光物産館アスパムが **CFS** のシンボルカラーであるブルーにライトアップされました。昨年は石川さんからの呼びかけで **CS** の専門外来を有する盛岡病院に参加呼びかけがあり、日本初となる **CS** のシンボルカラーであるグリーンで盛岡病院をライトアップしました。今年の看護週間では盛岡と青森で **CFS**、**CS** 両疾患に対するリレー講演会を開催し、それぞれの地でライトアップを行うことになりました。

まず先頭を切って 5 月 6 日の 18：30 より盛岡病院で **CFS** 支援ネットワークの石川さんにも来ていただきライトアップの点灯式を職員が見守る中で菊池院長、佐々木看護部長そして副院長水城の 3 人で正門前のポールをライトアップしました。他に病院の建物の壁もライトアップしました。ライトアップは 5 月 13 日まで毎日実施しました。5 月 7 日 14：30 より盛岡駅に程近いいわて県民情報交流センター（アイーナ）を盛岡会場として **CFS** 支援

ネットワークと盛岡病院の共催で『看護の日特別講演会』を開催致しました。CFS に関しては、秋田の外旭川サテライトクリニックで慢性疲労外来を担当されている三浦一樹先生（藤原記念病院 診療顧問）をお招きして「慢性疲労・慢性疼痛診療の光と影 全人的診療をめざして」という題名でご講演いただきました。CS につきましては私が「化学物質過敏症/シックハウス症候群の現状と、問題点と将来展望」という題名で講演しました。参加者はあいにくの強風と雨足が時折強くなる天候でしたが患者さんやそのご家族、医療関係者合わせて約 90 名の参加があり、非常に熱心に聴いていただいていることがひしひしと伝わってきました。講演会の様子は当日の夕方の NHK ニュースで放映されました。放映時間は短かく残念ながら CS についての言及はありませんでしたが、内容は以下の如くでした。

秋田県で慢性疲労症候群の診療にあたっている三浦一樹医師が講演し、「血液検査などでわからないため、家族や医師から、『精神的な問題だ』などと言われてしまうこともある。どこで診てもらえばよいかわからず、患者は苦しんでいる」と患者の現状を説明しました。三浦医師によりますと、慢性疲労症候群は原因がはっきりわかっておらず、専門的に診てもらうことができる病院は全国でも少ないということです。盛岡市の看護師の女性は、「患者の話をしっかり聞いて適切な医療につなげることが大切だと感じました」と話していました。青森市に住む患者で、講演会を主催した団体の代表、石川真紀さんは、「家族にさえ病気のことを理解されず、苦しんでいる患者がたくさんいます。多くの人に病気のことを知ってほしいです」と話していました。

盛岡会場の講演会后にカナダの患者さん達に向けてビデオメッセージの録画をしました。菊池院長、三浦先生、石川さんと私が参加し「カナダのみなさん、こんにちは！化学物質過敏症にやさしい環境はすべての人にとって良い環境です。慢性疲労症候群も同じです。すべての患者に希望の光を！」（英文訳を画面に流して）というメッセージを送りました。このメッセージについては後日カナダからもお返事のメッセージが送られてきて 5 月 14 日の青森会場の『慢性疲労症候群世界啓発デー in あおもり』（主催：CFS 支援ネットワーク）の会場で紹介されました。青森会場には水城も参加して、盛岡会場と同じ内容の講演を行いました。CFS に関しては AMED「慢性疲労症候群の治療」研究班代表である倉恒弘彦先生（関西福祉科学大学健康福祉学部教授、東京大学大学院農学生命科学研究科、大阪市立大学医学部疲労クリニカルセンター）が「慢性疲労症候群の診断と新たな知見」と題してご講演され、患者家族（母親）の立場で医師の深沢千香子先生（深沢クリニック）が「青年期発症の慢性疲労症候群の子をもつ内科医の母として」と題してお話しされました。これらの講演に先立ってドキュメンタリー映画上映や患者さんとの交流会がありました。そして最後のビッグイベントであるライトアップセレモニーではアスパムが CFS のシンボルカラーであるブルーに、ベイブリッジが CS のシンボルカラーであるグリーンに輝きました。ライトアップセレモニーでは患者さんやそのご家族、CSF 支援ネットワークのメンバーそ

して鹿内博青森市長、日本共産党の高橋千鶴子衆院議員も駆けつけて挨拶をしてくれました。

青森では CFS 支援ネットワーク代表である石川さんが在住されていて、体調が不良の日も多い中で懸命に活動の輪を広げられていて徐々にではありますが着実に協力者が増えてきていることでもあります。自治体や超党派の議員の協力が得られていることは特筆に値します。CS は環境の影響がさらに強い疾患です。冒頭に指摘した様々な環境の悪化により CS 発症患者数が増加している現状にあります、しかし CS についての周囲の人々の理解、協力はまだまだ不十分と言わざるをえません。今回の看護の日のイベントを、看護週間だけのものとせず、これをきっかけとして日常的に啓発活動や必要に応じて関連学会からの情報発信や自治体などへの法整備を含めた要望などの活動を地道に継続していくことが必要だと、今回のイベントを通じて決意を新たにしております。

CS は特別な病気ではなく誰でも発症する可能性があります。CS にやさしい環境はすべての人にとって良い環境です。CS にしても CFS にしても、このような疾患で苦しんでいるということを知っていただくだけで、気軽に協力していただけることはたくさんあると思います。これを読まれた方に CS や CFS の患者さん達へ一人でも多くの方々のご協力をよろしくお願い致します。